

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03283

研究課題名(和文) ミャンマーにおける民族知とそのパブリシティに関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study of Ethno-Knowledge and Its Publicity in Myanmar

研究代表者

高谷 紀夫 (Takatani, Michio)

広島大学・人間社会科学研究科(総)・名誉教授

研究者番号：70154789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主目的は、多民族国家における多様な民族知の共存の動態を、パブリシティの視角から、ミャンマーを事例として人類学的に明らかにすることであった。

研究成果の概要は次の三点。第一に、ミャンマーの代表的な民族的マイノリティであるシャンの民族知に関する民族誌的蓄積に貢献したこと。第二に、民族知集積と表出の母体である少数民族団体と交流を重ね、そのパブリシティの現代的位相を明らかにしたこと。第三に、マジョリティ的立場にあるビルマ族、仏教徒、ビルマ語母語の話者が優越する文脈を再確認し、民族知の構築と再構築の過程と結果に着目して、多民族国家における民族間関係の実像を実証的に明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、多民族国家に関する人類学的考察の発展を意図した研究計画であり、重要な学術的意義がある。具体的には、ミャンマーにおけるマジョリティとマイノリティ、その両方に注目する複眼的視点を洗練して、多民族国家における多民族共生イデオロギーの諸相を検証して、民族という「人」の多様で多義的なカテゴリーの理論的再考に貢献できたこと。またパブリシティという視角に着目して、多民族国家の民族論的状况を考察する萌芽的成果を提示できたことである。なお研究代表者は、ミャンマーの民族学研究の中心的部局であるヤンゴン大学人類学科客員教授の立場にあり、研究成果の現地還元にも積極的であるという点で社会的意義も顕著である。

研究成果の概要(英文)：This research project is an attempt to present an anthropological analysis of ethno-knowledge and its publicity in Myanmar. Outline of research achievements are as follows:

Firstly it contributed to ethnographic accumulation of Shan ethno-knowledge. Shan (Tai) people comprise one of the eight main nationalities in Myanmar. Secondly it clarified the modern phase of ethno-knowledge publicity through co-operation with ethno-knowledge-based organizations. Thirdly it empirically discussed about relationship between majority (Bamar people, Buddhist, Burmese native speakers) and minority in Myanmar context under the political and cultural pressure of Burmanization or Myanmarization.

研究分野：人文学

キーワード：ミャンマー 民族知 パブリシティ 人類学 シャン

1. 研究開始当初の背景

多民族国家ミャンマー(旧ビルマ)において、民族意識の根幹となる「民族知」に対する政治的統制は、多民族共生を実現するために必要不可欠な施策である。「民族知」とは、民族論的状況の文脈で規定され、あるいは範型づけられた知識の集成である。当時ポスト軍政期にあるミャンマーでは、特に出版物事前検閲全廃を背景に、「民族知」のパブリシティの表出が顕在化する一方で、その規制緩和の状況が、結果として対立の構図を実体化したことも見逃せない。バングラデシュとの国境付近で発生したロヒンギャ難民問題も、そのひとつである。

知識の構造を人類学的に理論化したバルトは(F. Barth 2002, *An Anthropology of Knowledge*)

主体の本質的な実在を示すコーパス、コミュニケーションのメディア、流通し、借用され、普及する母体としての社会組織を三局面として指摘した。パブリシティとは、集積されたコーパスが、多様なメディアを介して共有化される表出の状況を意味する。現ミャンマーにおける「民族知」のパブリシティは、各民族による自主的な伝統文化選定、少数民族言語の公教育への導入認可、文芸文化保存委員会組織化など、バルトの三局面いずれにおいても新たな状況にある。

本研究代表者は、通算約4年間の臨地研究に基づくビルマ族とシャン族の「民族知」に関する研究成果を、国内と現地で発表してきた。その過程で、多民族共生に関わる多様な「民族知」の社会的位相を、総体的に考察する必要性を痛感してきた。

本研究着想の経緯の概要は次の三点である。第一に、「民族知」研究の過程で、西洋近代との交流史の重要性を再確認した点である。ビルマ語辞典、シャン語辞典の編纂を、バプティスト派宣教師が主導したことは、西洋近代の知の構造との接触が、辞書というコーパス形態で「民族知」の輪郭形成に寄与したことを示唆する。ミャンマーの多数派が仏教徒であることから過小評価されているが、山岳少数民族にキリスト教徒が多数であるという事実からも、特にキリスト教との接点は、「民族知」研究には重要な視点である。第二に、パブリシティ概念の着想である。ハーバーマス以来(ハーバーマス『公共性の構造転換』1994他)公共圏・公共性の研究は、同概念の評価、対抗的公共圏の提唱など、多くの議論を生起させた。その学術的背景を踏まえて参加した国立民族学博物館共同研究会(「統制」と公共性の人類学的研究、2012-2015)で、シャン民族知を事例に、パブリックをめぐる議論を発展させるパブリシティ概念の開拓を試みた。同様の先行研究はほとんど認められない。本研究では、同概念を洗練させ、他「民族知」の事例に応用する計画である。第三に、近年、顕著な「民族知」のパブリシティの主体であるコミュニティ、あるいは国家と個人の間形成される中間集団の活動への注目である。彼らは、一方で、多民族共生を希求しながら、民族間関係に結果的に対立の構図を導く蓋然性を有している。本研究は、多民族共生イデオロギーの構造的な脆弱性を相対化することで「民族知」の共存の動態を総括し、現地に還元する積極的貢献をめざした。

2. 研究の目的

本研究の主目的は、多民族国家における多様な民族知の共存の動態を、パブリシティの視角から、ミャンマーを事例として、人類学的に明らかにすることにある。ポスト軍政期にあるミャンマーでは、マジョリティ的立場にあるビルマ族、仏教徒、ビルマ語母語話者中心主義が政府主導で堅持されるとともに、少数民族側の対抗的な民族知のパブリシティの表出が顕在化している。本研究では、現地協力者との共同作業を基盤に、一方で、バルトによる知識の三局面の観点から民族知をめぐる社会的位相に着目して民族誌的蓄積に寄与し、他方で、パブリシティ概念を洗練させて、多民族共生イデオロギーの相対化への方法論的貢献をめざすものである。

3. 研究の方法

本研究では、バルトによる三つの局面であるコーパス、メディア、社会組織を、民族知の重要な構成要素として、その共有化による表出状況からパブリシティの分析を行う。具体的な方法としては、民族知のパブリシティの主体である社会組織メンバーを研究協力者として、臨地研究による民族誌的コーパスの蒐集を重ねて、一次資料の充実を図る。その考察結果を当事者が主催する国際会議・セミナーなどの場で還元するとともに、現地教育研究機関(ヤンゴン大学、マンダレー大学等)主催の国際会議・ワークショップで発表して議論を深化させる。以上の研究成果を有機的に接合して、人類学・ミャンマー地域研究、多民族共生イデオロギーの相対化への理論的展開をめざす。

なお研究代表者は、2012年以来、ミャンマーの民族学研究の中心的部局であるヤンゴン大学人類学科客員教授の立場にあり、民族知とそのパブリシティの現場を内部から検証するとともに、研究活動の協働と研究成果の現地還元積極的に取り組んで来たという点で、独創的である。

4. 研究成果

主な研究成果は次の三点である。

第一に、ミャンマーの代表的な民族的マイノリティであるシャンの民族知に関する民族誌的蓄積に貢献したこと。第二に、民族知集積と表出の母体である少数民族団体と交流を重ね、その

パブリシティの現代的位相を明らかにしたこと。第三に、マジョリティ的立場にあるビルマ族、仏教徒、ビルマ語母語の話者が優越する文脈を再確認し、民族知の構築と再構築の過程と結果に着目して、多民族国家における民族間関係の実像を実証的に明らかにしたことである。

民族誌的資料蒐集のための臨地研究の具体は次の通り。2017年12月にシャン州南部パンロンで開催された The 5th Lik Loung (Tai Great Texts) Conference への出席と、連続して同地で開催された The 3rd Conference of Tai Society for Historical Studies での招待講演に伴うインタビューと意見交換。またシャンの民族知のパブリシティにコミットする新たな拠点としてシャン州都タウンジーに開設された Center for Tai Studies への表敬訪問とセンター長へのインタビュー（同センターは、2017年に学術雑誌 The Journal of Tai Studies を創刊し、本研究代表者も寄稿している）。また2017-2019年には、シャンの民族知の集積と保存の主体である各地のシャン文芸文化保存委員会に研究協力を仰ぎ、ヤンゴン、マンガレー、タウンジー、ムセーなどで民族誌的資料を蒐集した。ムセーは、緬中国境に位置し、2019年11月末に開催された シャン (Tai) 暦 2114 年正月行事には、中国雲南省タイ族ジンポー族自治区在住のタイ系民族、インド在住のタイ系民族も招待されており、シャン文化圏 (Shan Cultural Area) の現代的位相の現場を参与観察することができた。同行事では、シャン (Tai) 正月新年祝賀会の歴史をテーマにワークショップが開催され、小規模な形態では各地で個々実施されていたが、他地域から来客を招待しての本格的な祝賀会は、1970年代同地区での開催が嚆矢となったことが明らかになった。その議論の一部は論考にまとめ、直後のヤンゴン大学での国際学会の招待講演で言及している。またシャン系民族以外で、2019年3月にパオ族の同系組織メンバーからの支援を得て、パオの民族知のパブリシティの状況を参与観察したことも付記する。

研究成果の一部は、ミャンマーでの招待講演などで積極的に現地還元而努力する一方で、国内では、2020年度日本文化人類学会研究大会（オンライン）、国際的には、2023年6月にスイス・チューリッヒ大学での国際ビルマ（ミャンマー）学会（オンライン）などで公表している。

なお当初4年間計画だった補助事業期間は、新型コロナ・ウィルスによるパンデミックと、2021年2月1日に勃発した軍事クーデターにより見直すこととなった。計画再考と現地の研究協力者との相談を経て、期間を二度延長したが、2019年末を最後に、渡航を断念せざるをえない状況となった。その結果、当初計画していた非仏教徒であるキリスト教徒に関する「民族知」の一次資料は限られたものに留まった。また議論の深化は、メール交換、オンライン会議で補充することとなった。その反省を踏まえて、シャンの民族知に関する民族誌的資料の継続的蒐集、シャン以外の民族知とそのパブリシティに関する考察、さらにパブリシティ概念の理論的展開については、今後の課題とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 TAKATANI Michio	4. 巻 1
2. 論文標題 How the Bamar saw the Shan in the Pre-Modern Period	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Journal of Tai Studies	6. 最初と最後の頁 131-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKATANI Michio	4. 巻 1
2. 論文標題 Material Culture in Shan (Tai/Tay:) Cultural Area (SCA)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Conference Proceedings of the 3rd Conference of Tai Society for Historical Studies	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 高谷紀夫
2. 発表標題 シャン民族知とそのパブリシティ
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TAKATANI Michio
2. 発表標題 Shan/Tai New Year Festivals in Myanmar
3. 学会等名 The Centenary of the University of Yangon International Conference and Round-table Discussion on Anthropology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TAKATANI Michio
2. 発表標題 Water and Prayer in Japan
3. 学会等名 The international conference on Traditions of Water: Beliefs, Practices and Transformation, SEAMEO Chat Regional Centre, MYANMAR. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TAKATANI Michio
2. 発表標題 Material Culture in Shan (Tai/Tay:) Cultural Area (SCA)
3. 学会等名 The 3rd Conference of Tai Society for Historical Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 TAKATANI Michio
2. 発表標題 Shan Construction of Knowledge: Its Past and Present
3. 学会等名 15th International Burma Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 土佐桂子・田村克己・高谷紀夫他 計12名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風聲社	5. 総ページ数 333
3. 書名 転換期のミャンマーを生きるー「統制」と公共性の人類学(「ガラスの多文化主義」と少数民族のパブリシティ)	

1. 著者名 Keiko Tosa, Yukako Iikuni, Ryosuke Kuramoto, Lwin Lwin Mon, Ayako Saito, Michio Takatani, Miki Ikoma, Hla Maw Maw, Aye Aye Aung 計9名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies	5. 総ページ数 183
3. 書名 Conference Proceedings: Anthropological Studies of CBO and NGO Activities in Myanmar (An Anthropological Study of Myanmar's Shan Knowledge-Based Organization)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Everybody's Ethnic: 「民族」を人類学的に考える（知を鍛える：広大名講義100選） https://www.hiroshima-u.ac.jp/nyugaku/enhance_knowledge/anthropology_geography

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Field Study and Seminar: Anthropological Challenge to Field Research Methodology and Publicity	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ミャンマー	Mandalay University	University of Yangon	